

第12回 校長会議あいさつ

R.7.2.17 稲垣

立春も過ぎ、梅の花もほころんだかと思えば、ここ数日は寒の戻りが続いています。心配されたインフルエンザが落ち着きを見せているのが幸いです。卒業式の階段を全校児童生徒で登れるように、心のこもった式にしてください。また、この機を逃さずに、それぞれの教育活動が有する本来の価値を見据え、来年度の計画作成に当たるようお願いいたします。

本日は、二点についてお話いたします。

一点目は、今月初めに、来年度の新規採用者連絡会があり、以下のような主旨で挨拶しました。

○68 人の新任の皆さんを歓迎したい。世間では教職がブラックとも言われる中で、皆さんの志を嬉しく思う。教育課題はあるが、実際の学校は、子どもたちの笑顔で明るく輝いている。

○本市には、城跡にある学校から、山の中でクワガタが採れる学校、全校でアサリ取りをする島の学校など、いろいろな学校がある。児童生徒数も、25人から1000人超えまでであるが、どこの学校にも、皆さんを助けてくれる、頼りになる先輩教師がいる。安心して勤めてほしい。

○教職員としての構えを一つ。子どもたちのために、教師が「自分を変えていくこと」、具体的には、自分に新たな力をつけ、心も磨いていく姿勢をもつこと。向上の坂道は少し苦しいが、上った分だけ出会いも多く心地よい風も吹く。

○生活が大きく変わるので、健康に気をつけて、フレッシュな力で本市の教育を盛り上げてほしい。

新任者には、大学を卒業したばかりの若者も多いです。子どもや保護者とのかかわり方や社会人としての姿勢、生活リズムの大切さなど、ご指導をお願いします。

二点目は、佐久島しおさい学校が、全国海の再生・ブルーインフラ賞で、最高賞の国土交通大臣賞に輝きました。これは、アマモの保全活動を学校教育活動(しおかぜ学習)に位置付け、22年間にわたって、継続してきたことが認められたものです。子どもたちが、島の未来を思い、その中で自分たちができることを見つけ、学校文化として受け継いでいく姿勢を育むことは、極めて優れた教育実践と言えます。このような地域教材を活用した総合的な学習は、へき地教育がその先駆です。

「近い将来 島に留まって 新しく事業を興す子ども 家業を継ぐ子ども 島から出て 未知の世界へと道を拓く子ども この子らに必要な力は どのような変化に対しても 自ら考え 判断し 実行していく力である そして ねばり強く追究する力である」この文言は、35年も前に佐久島小・中学校が上梓した研究書「潮騒の子どもたち」の中扉にあります。下線部は、まさに昨今の学習指導要領が重視する探究力です。机上の理論よりも、子どもに寄り添った実践の中でこそ、教育の本質が見据えられます。各学校においても、このことを意識して授業改善に努めていただきたいと思います。